

学校编码：10384
学号：k1003007

分类号____密级____
UDC____

厦 门 大 学

硕 士 学 位 论 文

太宰治《人间失格》的研究
——以“死”为题

太宰治の『人間失格』の研究
——「死」の問題を中心に

陈 丽 锦

指导教师姓名： 吴 光 辉 教 授
专 业 名 称： 日语语言文学
论文提交日期： 2015 年 4 月
论文答辩时间： 2015 年 月
学位授予日期： 2015 年 月

厦 门 大 学

答辩委员会主席：_____
评 阅 人：_____

2015 年 月

太宰治《人间失格》的研究

陈 丽 锦

指导教师： 吴 光 辉 教 授

厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下、独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果、均在文中以适当方式明确标明、并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范（试行）》

另外、该学位论文为（ ）课题（组）的研究成果、获得（ ）课题（组）经费或实验室的资助、在（ ）实验室完成。（请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称、未有此项声明内容的、可以不做特别声明。）

声明人（签名）：

年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文、并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版）、允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索、将学位论文的标题和摘要汇编出版、采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

（ ） 1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文、
于 年 月 日解密、解密后适用上述授权。

（ ） 2. 不保密、使用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文、未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的、默认为公开学位论文、均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年 月

要旨

日本の「無頼派」文学の代表として太宰治は、日本文学史上非常に大きな地位を占めているものである。『人間失格』という文学作品が、太宰治の文学作品のなかで最も読者に強いイメージを残させるものであるとも言える。『人間失格』は、周囲への不信感から、自分の本心が見つからず、一人になってしまう恐怖から、自分の考えを隠し、周囲と同調することになるという人間の心の本質を描いているものであるとともに、作家本人の自伝的な遺作とも言われている。本論では、太宰治の『人間失格』という作品を中心に、「死」の問題をめぐって、死に対する日本人の見方や考え方及び現代社会における人々にとってはどういう意味であったかを明らかにしようとする。

第一章においては、まず、太宰治という文学者の生涯及び勉学履歴、社会活動などから太宰治の文学創作の背景を明らかにすること。次に、太宰文学の特徴から太宰治という文学者の性格まで、明らかにすること。

第二章においては、まず、『人間失格』の創作時間、背景、その粗筋、構成などの要素から、その創作ポイント、技法的なものに至るまで考察を行う。次に主人公の生活経歴、心理的な要素を通じて、生活への恐怖、人生への不安など氏の死亡の要因を述べたいと思う。

第三章においては、この『人間失格』に対する他人の評価、太宰治自身の評価を述べ、今まで作家だけでなく、多くの研究者は如何にしてこの作品を評価するかを明らかにしようとする。

結論として、まず、現代における太宰治の位置づけを再検討する。次に、現代の立場から『人間失格』を再検討する。つまり、この作品は、普通の人々にどんな意義をもたらしているかを検討したいと思う。

キーワード：太宰治 人間失格 死 共感

摘要

作为日本“无赖派”文学代表之一，太宰治及其创作对日本文学具有不可替代的影响和推动力，尤其是其创作的《人间失格》这部小说最为人们所热衷。主人公对周围世界的不信任感，无法展露真实的自己，作为个人存在的恐怖感从而隐瞒自己的真实想法以保持和周围人们一致的步调的描写，刻画出人的终极内心世界的《人间失格》被认为是太宰治本人的自传式遗作。本文通过太宰治的《人间失格》中所描写的“死”为题，阐述日本人对于“死”的定义及其对于现实人们的意义。

第一章，首先从文学家太宰治的出身、求学经历、社会经历等方面来了解其创作背景；其次，叙述了太宰文学的特征乃至文学者的性格。

第二章，首先阐述了《人间失格》创作的时间、背景、梗概、结构等方面表现了太宰文学的创作要素、创作手法等；其次，通过描写主人公的生活经历、心理过程等揭示了其死亡原因、即对生活的恐惧感和人生的不安。

第三章，阐述了他人对《人间失格》的评价及作者的自我评价。迄今为止，不仅仅是作者自己，众多的研究学者亦给予《人间失格》予自己的评价和看法。

作为结论，首先对太宰治的现代定位进行了探讨；其次，站在现代的立场重新审视《人间失格》这部作品，探索了《人间失格》对于现实中的人们究竟带来了什么样的深刻意义。

关键词：太宰治 人间失格 死 共鸣

目 次

はじめに	1
第一章 太宰治という文学者	3
1.1 生涯	3
1.2 先行研究	8
1.3 本論のアプローチと章立て	11
第二章 『人間失格』のテキスト分析	13
2.1 創作ポイント	13
2.2 「死亡への道」	20
第三章 太宰治の『人間失格』の評価と意義	26
3.1 他人評価	26
3.2 自己評価——人性の共感	29
結論	32
4.1 太宰治の位置づけ	32
4.2 『人間失格』の再検討	34
参考文献	37
謝辞	41

目录

序	1
第一章 文学者太宰治	3
1.1 生涯	3
1.2 先行研究	8
1.3 本文的思路和框架	11
第二章 《人间失格》的文本分析	13
2.1 创作要素	13
2.2 “死亡”之路	20
第三章 太宰治《人间失格》的评价和意义	26
3.1 他人评价	26
3.2 自我评价——人性的共鸣	29
结论	32
4.1 太宰治的地位	32
4.2 重新审视《人间失格》	34
参考文献	37
谢辞	41

はじめに

1933 年、日本の哲学者三木清^①は「不安な思想」という文章を発表し、第一次世界大戦以来西洋の「人格の解散」による不安な思想と文学に言及し、1930 年代の日本の知識人がすでに普遍的「不安」の危機に直面したと指摘し、「不安の文学を超えるために、新たな『人間』の代表を創出しなければならない。」^②と主張している。このような新たな「人間」は、人間の芸術的な生活意識を強調し、人間の「身分」、あるいは人間の「同一性」を重ねる新しいイメージを表している。

太宰治はまさに、このような時代の「不安」に陥入した作家の一人である。1927 年、芥川龍之介が自殺した。この事件は、太宰治に大きな衝撃を与えた。1929 年に地下の左翼運動に参加し、日本の憲兵に逮捕された太宰治は、仕方なく立場を変換せざるを得なかったが、それによって裏切りの名を受けていた。その時から、処女作の『晩年』が出版された 1933 年まで、太宰治は二度も自殺し、精神病院に入院させられた。この時期における自分の創作の心境について、「死に覆われている猛省し、自嘲し、恐怖の雰囲気の中で死んでしまなかった私は遺言と言え一連の作品に置かれている。」^③と自ら語っている。このような猛省、自嘲、恐怖は、全部「死亡」から生んできたものである。つまり、自ら生命の存在価値や存在意義に対する一種の根本的な不安である。

根本的な不安は、太宰治の文学創作のテーマの一つである。それは、『人間失格』という作品にも深く反映されている。小説の最初から、日記の主人公の大庭葉蔵は、自分の自己閉鎖と他人疎遠の心を持ち、生存の不安に陥っている。「恥の多い生涯を送ってきました。」^④というように、主人公は不安と恐怖に侵入され、解脱できない。このような不安と恐怖に陥ってしまった主人公は後に、

^①三木清 (1897 年 1 月 5 日 - 1945 年 9 月 26 日) は、(西田左派を含めた上での) 京都学派を代表する哲学者。

^②平岡敏夫、東郷克美、日本文学史概説[M]、東京：有精堂出版、1986 年、第 166 頁。

^③奥野健男、太宰治論[M]、東京：新潮文庫、1984 年、第 271 頁。

^④太宰治、人間失格・桜桃 (角川文庫 750 I) [M]、角川書店、1989 年、第 8 頁。

徹底的にそこから脱して、「閑静なり朗らか」のような気持ちで「生きていく自信」を見つけようと望んでいる。

日本の「無頼派」文学の代表として太宰治は、日本文学史上非常に大きな地位を占めているものである。『人間失格』という文学作品は、その文学作品のなかで最も読者に強いイメージを残させるものである。太宰治の『人間失格』は、周囲への不信感から、自分の本心が見つからず、一人になってしまう恐怖から、自分の考えを隠し、周囲と同調することになるという人間の心の本質を描いているものであるとともに、作家本人の自伝的な遺作とも言われている。本論では、太宰治の『人間失格』という作品を中心に、「死」の問題をめぐって、「死」に対する日本人の見方や考え方を明らかにしようとする。

第一章 太宰治という文学者

井上靖はかつて次のように太宰治のことを語っている。

もし文学者のオリンピックがあって各国ひとりずつ代表を出すことになったら、日本の代表は夏目漱石でも谷崎潤一郎でも川端康成でも三島由紀夫でもなく、すこし小さいかも知れないが、やはり太宰治以外にはいないと、ぼくはそう思う。^①

というように述べている。すなわち、太宰治は、けっして大きな存在、あるいは世界的文学者とは言えないが、日本の代表として十分な資格を持つものである、と井上靖は考えている。

では、太宰治とは誰か、本章では、太宰治という文学者の生涯から始まり、その文学の特色にまで論じてみたい。

1.1 生涯

1.1.1 生い立ち

太宰治（1909－1948）は、本名は津島修治。1909年6月19日の夕暮、青森県北津軽郡金木村、後の金木町、現在の五所川原市大字金木に、父津島源右衛門（1871－1923）、母たね（1873－1942）の第十子、六男として誕生した。太宰治の家は、山源（ヤマゲン）と呼ぶ津軽でも、屈指の大地主だが、太宰の生家は、今でも「斜陽館」と呼ぶ宿屋に変わって現存しているが、「この父は、ひどく大きい家を建てた。風情も何もない、ただ大きいのである。」と太宰自身が語っている。「その赤い大きな屋根は、かなり離れた近村からも、ハッキリそれと、

①奥野健男、太宰治論（新潮文庫）[M]、（株式会社）新潮社、昭和五十九年六月二十五日（1985－06－25）、第304頁。

望見出来るほどだ。」^①

太宰治が自ら述べているように、祖父の惣助は、急速に富裕になった金貸地主であり、父の源右衛門は、木造村の豪農松木家からの婿養子で県会議員、代議士になったりし、衆議院議員、多額納税による貴族院議員等をつとめた地元の名士である。津島家は、「金木の殿様」とも呼ばれていた。母たねは、病身がちで、「母に対しても私は親しめなかった。」^②というように、太宰が初代と結婚するまで、母のたね女から「見事につげ込まれた津軽の漬物を毎年欠かさず送って貰っており、それを私達に大層自慢にしていたものだ。」まさに研究者の檀一雄によって指摘されているように、それは、坂口安吾がその母を語る奇怪な文章と軌を一にしている。^③

1.1.2 勉学時代

太宰治は、小学校を首席で卒業したものである。ただし、何かのために一年間高等小学校に留年し、しばらく足踏みをしたようである。「虚弱のせいである」と太宰治はかつて語っているが、相馬正一氏の研究によると、津島家が、金木小学校に対して持っている威圧力から、かえって太宰自身の学力の真価があやぶまれ、一年間補充教育を受けることになったのが真相のようだ。^④

いずれにせよ、この一年間の挫折感、重苦しさは、人一倍見栄坊の太宰治に、シェストフ風の地下室を作らせたかも知れないし、或は太宰の作家としての濃厚な気分の一部を形成したかもしれない。後に、太宰治は青森中学に入り、中学四年から弘前高等学校に入学する。まさに檀一雄が「解説」の中で解釈を加えているように、「自分が秀才でなければならず、その秀才の証明の為には、是が非でも、中学四年から高校に入学しなければならなかったようだ。」^⑤

この「秀才」という言い方は、よく知られているように、中国古典から由来し、優れた人材のことを意味している。高校入学というのは、その時代の太宰

^①太宰治。人間失格・桜桃（角川文庫 750 I）[M]。角川書店、1989 年、第 140 頁。

^②太宰治。人間失格・桜桃（角川文庫 750 I）[M]。角川書店、1989 年、第 139 頁（解説：太宰治——人と文学 檀一雄）。

^③太宰治。人間失格・桜桃（角川文庫 750 I）[M]。角川書店、1989 年、第 139—140 頁（解説：太宰治——人と文学 檀一雄）。

^④太宰治。人間失格・桜桃（角川文庫 750 I）[M]。角川書店、1989 年、第 140 頁。

^⑤太宰治。人間失格・桜桃（角川文庫 750 I）[M]。角川書店、1989 年、第 140 頁。

にとって、家族からの影響が重圧とも考えられるが、どこまでも太宰自身の切望とも言えるであろう。

1.1.3 文学者として出発する前夜

一年間の補充教育を受けたりして、そろそろ太宰治の自分自身で抑制も統御も出来ないようなあやしい肉感と心熱の動揺は激しくなった。この時期の太宰は、学業は半分放棄の状態になり、プロレタリア文学気取りの作品執筆になったりした。、ひとつの大きな事件が突然襲い掛かってきた。すなわち、最も敬愛する芥川が、1927年に自殺した。

猛烈に衝撃を受けた太宰は、学業を放棄、義太夫を習ったり、花柳界に入りびたったりした。青森の料亭で15歳の芸妓（げいぎ）・小山初代と知り合い深い仲になった。1929年（20歳）、秋頃から急激に左翼思想に傾斜した。同年の12月10日深夜、最初の自殺未遂。それは、資産家の子という自己の出身階級に悩み、下宿で睡眠薬（カルモチン）による自殺を図り、昏睡状態に陥ったのである。

後年、酔った挙句、太宰がこの義太夫のことを次のように述べている。「私を悩ましたことも再々あるが、口をゆがめ、金歯をひらめかせ、語り出す義太夫は、どうひいき目に見ても、余りほめられたものではなかった。それを自分でもよく知っていて、余程のことがない限り、人前では、語り出さなかったものである。」^①というように、自分の心境を述べている。

ところが、この義太夫の情緒と伝統は、太宰の文学の中に、たくみに活用されていて、その綾の一筋になっている。それは、「落語」と同時に、太宰の文学形成の上に、忘れてはならないことだろう。^②

1.1.4 小説家としての登場

16歳の頃から、太宰は、小説やエッセイをクラスメートと作った同人雑誌に書き始めた。高校では芥川、泉鏡花に強く傾倒し、中高を通して書き記した習作は200篇にも及ぶという。芥川龍之介に強く傾倒しつつ、1933年（昭和8

^①太宰治. 人間失格 桜桃（角川文庫 750 I）[M]. 角川書店、1989年、第140頁。

^②太宰治. 人間失格 桜桃（角川文庫 750 I）[M]. 角川書店、1989-04-10：140-141頁。

Degree papers are in the “[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)”. Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库